

身近な環境から地球環境へ

安田陽子 大阪府大阪市立四貫島小学校教諭

1 課題のねらい

身近な環境から地球環境へという大きな視野で物事を見て、環境悪化の影響などを理解する。新聞記事の中から、自分たちにできることを見つけ、考え、実践していく。

2 学習内容

時

主な発問・指示

指導のポイント

1

- ごみのしまつについて学習する
- ごみのしまつと不用品の活用について新聞などで調べる

- 自分たちの地域のごみのしまつの様子を想起し、意見を出しながら問題提起していく。
- 学習したことから、実際に問題となっていることやこれから考えていかねばならないことに視点をあて、新聞などから調べることに気付く。
- 他の資料から調べてもよいことを知る。
- 切り抜いた記事や写真をワークシートに張り、問題点・意見・感想などに分けてまとめておく。

(家庭学習)

学習したことを新聞の中から探してみよう。また、リサイクルについても調べてみましょう。

2

- ごみのしまつと不用品の活用について学習する

- ワークシートをもとに、自分の意見を発表する。
〔問題点・意見・不用品の活用・感想〕
- 論点をはっきりさせ、自分の意見を発表する。
- 友達の報告に対して、自分の意見や感想を述べ、互いに高め合う。
- 今後、自分たちでできることを話し合い、各自のワークシートに書き込む。
- ワークシートを掲示する。

それぞれが選んだ記事を報告してください。
友達の報告・意見を聞いて、質問のある人、異議のある人、同じ考えの人などもどんどん意見を出してください。

3 評価

- 自分たちの出すごみが、いかに環境悪化に影響を及ぼしているかが理解できたか。
- 新聞記事を読んで、自分たちが協力し実践できることを見つけたか。

4 関連する他の分野・単元

▶【環境】【国際理解】【福祉】【社会 限りある地球と日本の国土】【図画工作】

※児童の感想

- 新聞を読んで自分たちでも協力できることが身近にたくさんあった。捨てる前に考えてみることを実行したい。
- 今はいいけれど、これからのことを考えると今考えなければいけないことがたくさんある。自分たちが大人になった時、住みやすい地球のままであるために、一人ひとりができることを考えたい。

資料

資料
1
ワークシート

調べよう (家庭)

No. 1

単元 身のまわりを整えよう (ごみおとし用品の活用)

ねらい 環境に悪いものを見つける
自分たちができることを見つける。

氏名

陶器やびんをガラスに
ガラスリサイクルに挑戦

夢を追う

私たちが日常的に使うガラス製品。これから環境問題を意識する人は少ないのではないだろうか。ガラスプロデューサーの鍋谷孝さん(36)は、不用になったびんや捨てられる花の鉢、割れた陶器などを「東京産ガラス」として再生するガラスのリサイクルに取り組んでいる。「ガラスの原料である砂や岩石は貴重な自然資源」との思いからだ。

鍋谷さんがガラスプロデューサーになったのは4年前。親がガラス工場を経営していたことから、広告代理店を辞め、ガラス製品をプロデュースする会社「フォレスト」(東京都大田区)を設立した。ガラスの主原料は砂で、現在はほとんどがオーストラリア、東南アジアなどからの輸入。紙の原料の木が年々減っているのと同様に、ガラス原料の砂も減っている



大谷右でつったガラスを手にする鍋谷さん
として販売が始まった。これで自信を深めた鍋谷さんは、リサイクルに挑戦。廃品となったガラスびんを集めて、いったん細かく砕き、かまに入れる。11

《まとめ》

牛乳パックからハガキをつくったり、いろいろ工夫している記事がありました。でも一部の人たちだけがんばってもおもしろいとおもった。私たちが大人になるときの地球のことを考えていくと、こわくなるが、なにをすればよいのか、もって考えて、実行していきたいと思う。

毎日10/26
朝刊

政府広報

10月はリサイクル推進月間です。身近なリサイクル社会の構築には、消費者、事業者、行政が連携して取り組むことが重要です。このリサイクル社会の実現に向け、資源の有効利用の確保、廃棄物の発生抑制、環境の保全などの効果がもたらされます。消費者一人ひとりがリサイクル社会の構築と資源の節約を通じて、自分ごととして取り組むことが大切です。資源の節約と環境の保全に貢献してください。

《この記事を選んだ理由》

自分では、みつけられなかった。友だちの記事の中からえらんだ。ジュースのびんでも、その持たえているので、それがどうしてリサイクルになるのかとおもった。

《問題点》

大阪でも、分別しゅうしゅうが、いわれてきている。でも、ついでビンなどは、ゴミばこに捨てられている。私もえらんだが、みんなあまり意識してないとおもう。

《自分の意見》

自分はつくれないが、あつめることや、わけておくことはできるとおもった。

《友達の見解》

一度つくってみた、という人がいた。

《感想》

ビンだけでなく、自分の身近にも、いろいろな物や、つかっていないものがたくさんある。どんどん新しい物をつくったり、かたづけたい。いきたい。

資料
2
1 毎日新聞
1996.10.28 付朝刊

陶器やびんをガラスに
ガラスリサイクルに挑戦

夢を追う

私たちが日常的に使うガラス製品。これから環境問題を意識する人は少ないのではないだろうか。ガラスプロデューサーの鍋谷孝さん(36)は、不用になったびんや捨てられる花の鉢、割れた陶器などを「東京産ガラス」として再生するガラスのリサイクルに取り組んでいる。「ガラスの原料である砂や岩石は貴重な自然資源」との思いからだ。

鍋谷さんがガラスプロデューサーになったのは4年前。親がガラス工場を経営していたことから、広告代理店を辞め、ガラス製品をプロデュースする会社「フォレスト」(東京都大田区)を設立した。ガラスの主原料は砂で、現在はほとんどがオーストラリア、東南アジアなどからの輸入。紙の原料の木が年々減っているのと同様に、ガラス原料の砂も減っているはずで、「これからはガラスのリサイクルも必要になる」と考えるようになった。

そんな時、宇都宮市の第三セクター「ろまんちっく村」から、ふるさと製品になるようなものを作ってほしいとの要請があった。思いついたのが、宇都宮特産の大谷石を原料にガラス製品をつくることだった。初めは「本当にそんなものができるのか」という疑問が出されたが、鍋谷さんが「ガラスの原料のケイ素が含まれているから大丈夫」と説得した。

第三セクターと協力、1年以上にわたり60種もの試作品をつくり、ようやく完成にこぎつけた。大谷石の特徴である淡い緑色が浮き出たガラスで、「大谷ガラス」として販売が始まった。



大谷右でつったガラスを手にする鍋谷さん
これで自信を深めた鍋谷さんは、リサイクルに挑戦。廃品となったガラスびんを集めて、いったん細かく砕き、かまに入れる。1100~1500度の高温で半日ほど加熱、液状にしたうえで、吹いてガラスに仕上げる方法である。テストケースとして、11月17日、東京都立川市の国営昭和記念公園で開く「生命のまつり」(同まつり実行委員会主催)に参加、ガラスリサイクルコーナーを開く。市民が持ってきた不用のびんを、自ら細かく砕いてもらい、来年1月末には、希望する4文字を入れたガラス製品にして送り出すシステム。「ガラスは人間への地球からの大切な贈り物。ガラスの再生が、資源を見直すきっかけになれば、ガラスリサイクルというユニークな取り組みから環境保護を訴えたい」という鍋谷さんの試みは今始まったばかりだ。【川崎 亮】